

第101回 全国高校野球選手権 青森大会

▶第11日◀

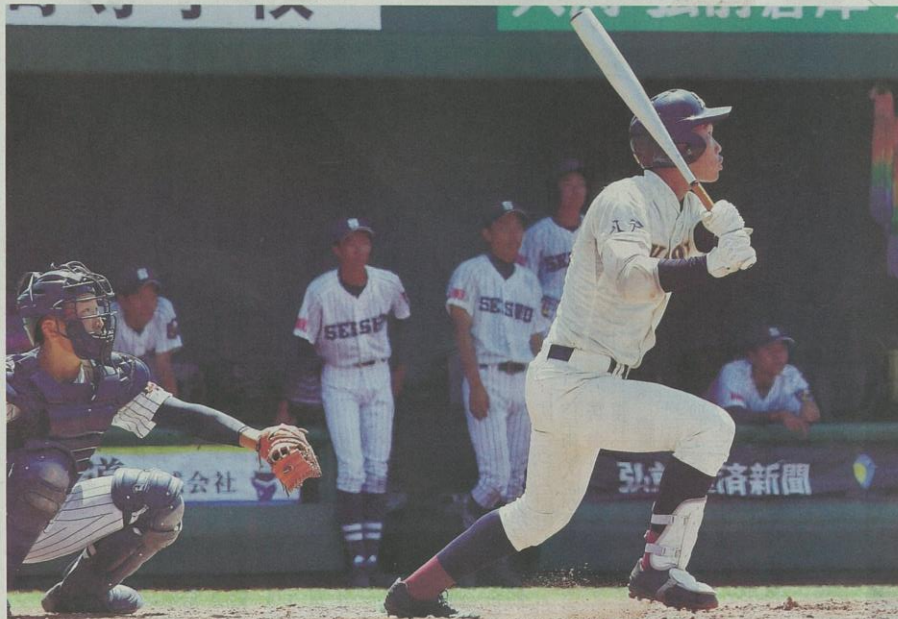
あす決勝 光星 vs 聖愛

第101回全国高校野球選手権青森大会は21日、弘前市はるか夢球場で準決勝2試合を行い、3季連続の甲子園出場を目指す八学光星と、6年ぶりの甲子園を狙う弘前学院聖愛が決勝に名乗りを上げた。決勝は昨夏と同じ力

ードとなった。光星は中盤以降に打線が本領を発揮し、青森商を8-4で下した。聖愛は東義との同地区対決に13-12で競り勝った。22日は休養日のため、試合は行わない。23日の決勝は午後1時試合開始。（取材班）

あすの試合
▽決勝
八学光星 vs 弘前学院聖愛
13 00

光星 ここぞの底力



【青森商-八学光星】5回八学光星1死一塁、原瑞都が中越え2点本塁打を打ち4-1とする=弘前はるか夢

好機に集中打撃守光る

ポイント

相手先発は本振の右腕藤林泰誠で、八学光星にとって「デタ」にはなかった。原瑞都、右の横で、序盤は手すり、三回まで

スコアボードに「0」が並んだが、ナインに焦りはなかった。中盤以降はここぞの場面でも集中打を浴びせ、王者らしい戦いぶりでした。しかし、攻め込まれて迎えた五回一死一塁で、打席に入ったのは藤藤。二打席まで詰まっていたが、目

は憤れたと、内角の直球を一振り。右翼線へ鋭い打球を飛ばし、すさまじく勝ち越した。続く原も「自分も続く」とばかりに甘く中に入った直球を強振。流れを引き寄せる豪快な放物線を左中間に描いた。粘り強く食らい付かれ、一点差まで縮められたが、それでも、無失策の守りと継投での

だ。そして八回、獲れた相手投手から原の集中打で4得点、勝負強い打撃セブテリーを奪った。ベンチの期待に応えた原は、ついでに打って良かった。仕事感ができて良かったとさら。仲井崇基監督は流れた行ったり来たりしたが、勝負強くやってくれたとナインをたたえた。

3季連続の聖地まであと1勝。原は「決勝の緊張の中でも、しっかりと強いスイングをした」と、静かに闘志を燃やしていた。（林泰輔）

4投手継投、反撃かわす

○八学光星は4投手の継投で4失点。必死に食らい、青森商打線は何とかわし、逃げ切った。先発は右腕藤藤太樹。長身から投げ下ろす直球でカウンを整え、決め球のフォークで三振を奪うなど、五回を1失点にまとめた。「持ち味を生かすことができた」と充実感をにじませた。

「徐々に球がよすつてきた」と判断した仲井崇基監督が六回に送り出したのは弘前市出身の右腕下山昂大。強気に内角へ投げ込んだが、七回に3連打などで2失点し、追い上げを許した。下山は「今大会リリーフは初めてで、緊張して準備になり、相手の待っていた直球を打られた」と反省。その後は横山海野風、山田怜卓が締めた。

取覆も反省もあった継投。4人をリリーフした捕手の太山皓仁は「決勝も総力戦になる。準決勝以上にそれぞれの得意球を生かせるようリードしたい」と意気込んだ。

主将武岡 攻守けん引

○八学光星主将の武岡龍世が攻守でチームをけん引した。攻撃では、今大会初めてリードオフマンに起用され、5点出塁。八回には一死一塁から左翼線への過剰な暴打で貴重な追加点に貢献した。武岡は「一番として、チームを勢いづける打撃ができた」と胸を張った。

守備では三回、中前に抜けていけば、走者が生還してはならない打球を、好フィールドインクで遊ゴロに仕留めた。五回にも死一塁で打球を巧みにさばいて再び遊ゴロに仕留め、勝ち越しを許さなかった。

武岡は「できることをしているだけ」と手っぴで冷静。「調子は上がってきた。次もいい結果につながるようプレーしたい」と、一歩を固めた。



8回八学光星1死一塁、左翼線に5-3とリードを広げる過剰な暴打を放ち笑顔でガッツポーズする武岡龍世